地方凡例録

一

ワ 3
470
1

地方凡例録巻之壱

目録

一 地方總論
一 井田大意之事
一 地方古之畝歩之事
　附 田地一反三百歩濫觴之事
一 國郡郷里發之事
　附 地境炭埋始之事
一 御代官地方始之事
一 上方関東國々并田畑間之事
　附 御料私領之事

門號 登 470
巻 1

一 在之部之事
附 在来之事

一 貫之部之事
附 小分走之字役一騎人數之事

一 永之部之事

一 石之部之事

一 小成之部之事

一 出目之部之事

一 町反畝歩之事

一 荒地之部之事
附 荒地之部取貢年々仕付之部掛例之事

一 村之部之事

一 野之部之事

一 海之部之事

一 山之部之事

一 寺之部之事

一 猪之部之事

一 猟之部之事

一 除地之部之事

一 除き之部之事

一 以之部之事

一 延之部之事

一 検見法之事
附 新開改出之事　縄竿寸法違代之事
新開改出新田検地五分歩組之事
新開改所秣山新田見分之事
一 反歩之事
一 取箇五公五民之事
附 取箇之四割七分之二割増之事　大名之事
上方関東山林等之事
一 田畑並麦之事
附 一丈の法並段之事
一 屋舗八分法之事

一 地方凡例録巻之一
地方総論
夫地方と云て外ニハ無之、古周の世に本朝ニても人
利用厚生の道にして仁政を行ひ井田を定め地方の始源を
古我国の中古英臣之智略を尽し文武兼帯して士ハ
内を治め外を守るハ判剳し文武兼備之威万民を撫育
王臣百姓を出して兵家二千姓等に八十姓を分ち万民を
百姓を上古之農に分ち士を耕し西収の勢を励し上納
府の兵糧を蓄へ御膳の備へ至の用に備へ農分士
も出し乱を鎮め平治し民を安ずる也
王の民にして耕農を業とし此にて之を百姓と唱へ

其外工商の階ありて夫々の業を営むといへとも衣食の二つを離
るゝ事なし中にも農を以第一とし五穀の元は百姓の農を勤むる
外に民ハ出来ぬ事なり其外宝玩揺園候今人民活をなし其余の竹木
銅鉄金銀銅錫鉛糸綿麻布其外三草菜根の
類都て土地より生る物又ハ河海沼沢の産物まて皆地方より出
し農民より出るものなり其中農業の根本より関る
百姓ハ万古不易にして百姓を二つに立置利し来るの
根元之務とも古より居て二民を見て而して勤め士
も人共不治ありて事務を安んと尹は織を裁を学ひ廣く
に至まて民は農民家業して農家の勿々能く作物
実となす穀ハ豊熟して田畑を荒地にならしまて民生を

以て成るへきといふや元関をもハ国家し天下誠を治て民肯く
所ハ天下穏かなる事に至るも銭穀の所ハ民数ハ銭穀在る
所ハ民穀をもって入り肥正税を取る民を以て善に治る
るへき事なきを地方に於ても緩る時ハ万民も是に至る民の産
殖以耕耘又力を以五穀出穫して上下安ふなる民ふ年々
治まる年や

一 地方の業といふハ土地経界を正しくし地位の上中下を能く知
りて田園耕地し末代まての損失を推知して其時々の
不易之の事にて万民上下の安堵若は常の作物の豊凶不熟
なれ人々農事の業とに候得ハ稲秋肥之事収納等の序列
を遠くせ新作ふ急務数年し流一作ハ損益其の可否を積

元し年の豊凶を考 祠祀枢の文ハ用水川渠の為に待
此ぶの務多と銘附あるの神之為る待ハ西土大禹として
禹司空たりし時 疏九河陸海沢決汝漢排淮泗隄横
備利し水を治る八年外に在して三度其門を過れとも不入
手足胼胝を成中食をはなれて思ひ語ても謹て是ると
る手足土地之 禮記月令にも季春月之命司空曰時雨将降
下水上騰循行国邑周視原野修利隄防導達
溝瀆開通道路毋有障塞するとあれハ古より堤防を撰
以邑里に於し溝渠用水川渠を修補せしめ土地の潤沢あらく
上豪閭之まて下は民の難苦を救ふの美政たり地所
用水ありてハ其年豊熟郡ある事多し故に村里繁栄する

立法の美徳行れハ神農氏と云ふ帳理所は無窮也 嘆の
時より後の人民都邑又ハ家々に耕ハ必ズ是縄御を
恩沢を受る能ハ和を祈て祀候事 相続ハ天下を治る令
ハ必す都邑続く料を耕作ハ漫微して多り
を見羅を存まうやうの豊羅を耕やすて手足を
羅も人あのる所ハ其以豫の大帝も此之法を多し徳
しくて羅人其耕 数式に生て曖を争ひ境を論ありす
あく耕議乱起あまりして恨ありて争ひ安を及ち生する小
吏之文の組府多く恨の絶さる村有困窮を基とす元
諸人其豪ハ能人ハ悉くの気力を失ひ争論に及ぶや
天下皆水旅の無理を立てしまする理先は無理し思ふ所

其理ハ素より待たるの理先にも大なるの理ありと思ふ
此に至て理ありて正に古理なるやと 自然と言利を知らぬ
手前ニ得る智を先立自己のなすへきハ公様の法ニ背き
也 堺を編し或ハ今證あるニ付ても 年来聖人の教へニ
正理乱の事利欲理之為ハ 下民ニ至迄 味なき事なれハ 此是
年貢上る事 手際を村役人とも能得して 村中ニ申のことく
年貢出来る事ニ心得し 以国窮ならぬ村方ニ流るる年貢出なる絶え
外の致締も無し 役ニ依る 年貢三段ニ相定めて後日に
下ニ無き所の村方ニハ 年貢出来なる事との所々ニ成
村中能得るの今窮まるに根本ニ不入今日之営も據ニ無
自ら致事も能く理なく出入致す事も是ニ至る

租税庸役なとを薄くし 課役なと省き農業を励し玉ふ
農業疎ニ随情成たるハあしく 教令して世俗ニ流れさせまし
聖遠きハ其事を改し政を行ふ時ハ万姓帰伏して農業盛ニて
相待し代物等便なる村方も能得て自然と困窮ニ至る事
此致締も有ましく候ハ 親子の所まても 能々申合すハ 家せも
村役人とも遠ふかる事し 樹遠く致し 猶も其事も行ふ事
此樹遠く成行ん 猶も其事の致される 致し事ニ申候
成事との理の 相談の致す様ニ致す 寺請致す
下ニ立民を役業ニハ 申ニ上下共年ニハ
不納首姓の所代ハ寛政を第一 風俗ニ付申ニ
様ニ相編み 殊ニ仁徳之事ハ 下民まても申のことく

其身を父母ニ構養に至りし忠政ハ其ニ家ニ事
ニ御主を報する構なり其身を経履し是ハ世為難事也
中々ならぬ不和所ある時ハ必修と難く候年要修る之地方構の
役人様ハ年貢等の諸之制ハ百姓難儀を痛て蔵を
武士諸役を公儀へ百姓商買共の風俗を是に耕
作諸成る儀ハ其後賞の難儀ハ候へ共年貢
諸役の為ニ不足之事下民為成らぬハ政及割合あれ
治り候ハ百姓ニ不依して御下り其を勤る事之又和らかなるハ
上を遅して急に修して家作事不足ても其政を知るの
所ある事人ニ成る安から少く人ハ難き事之也と別ニ為さるの
様ニ其難儀ニ至り候ハ政及の絶弱行為之事ニ政務を構る

人ハ文字よめは仁心忠貞にして能人と賢愚を知りて其役備
候の紫偽諸親疎の差別なく指人を捌住ニ宜敷様公儀へ掛り候様
て下々実意ニ貢ある事を能く擇ニ其餘勤養有り
候事猶又不得止事を一己の情ハ公事を宜しく様下々に至り
き郡方百姓ハ公の為を知る事を知る又ハ惠の恩を可聴ね
其上村年貢不足へ論をたし能く仕ニ下々を治めて地方
を能く知り取勤無てハ有らぬや

一
山作御陸或ハ流作地年々免宜しく割附を年々行ひ
又は米穀ニ不足て御用の為ニ其根本ニ有て成る所百姓
其る道ハ其時利を考へて納め作とて宜しく可役年々公儀備ニ
手傍にて宿根ともし細絶の害を救ふ事なり是又地方を

五井ニ志ス公掛や

一 百家之蔵ニ茶樹ヲ老之枝ニ蘇枝ヲ生ス山家ニ定

一 地ニ生スル桑楮ハ四季ニ備ハ勿論ナリ公ヘ上ル用年

地ヲ生スル所ハ不定ニ物産ヲ取ル事ハ国家ノ要務ニ候

法ニ付其國ノ作法ヲ立置キ申スヘキハ不及申ニ候

草木ノ類ハ繁茂モ根ノ作法ニヨルヘキ也遂ニハ不絶御掛

為ニ土地ニ不足古来分ケ作法ハ古来ヨリ多キ事也下ニ其

所ヨリ出来ル所作法ヲ以テ物産ヲ出スハ国家ノ要務ニモ

君子之行ハ不求之但作法ノ祖法ヲ守リ後世ノ作法ニ従フ

世ニ國ノ政法作法ニ従ヒ四民ノ作法ハ其作法ノ定

風俗ノ例ニ寄ル作法ニ従テ大地ノ物産作法モ順ニ例ヲ定

ノ用ニ立ル作法ノ経世ニ従テ定メ其民ヲ服ス居ヲ考ヘ

経ノ事ヲ居ヲ定メ取ル所ノ正ニスル所モ田畑ヲ改ル

作法ヲ以テ取立ル事ハ古来ヨリ多キ事也

大体之法ニ寄ル作法ヲ改ル所ハ皆政ノ要ニテ四民ノ其土

金之制度ヲ勘ル所ハ遠ク田園租税ノ法ヲ定ル作法ニ代々ノ如ク

之ヲ定メ今ヨリ其中ニ一国年貢ノ法ヲ今ニ至ル作法ヲ

而ニ於テ古法之要ハ其土地ニ経ル所ハ世ニ在ル事也

但田畑ノ地ニ当リ利ヲ見ル所ノ限ニ従ヒ其年ノ十分ノ一ヲ定

出ル利ノ事ニ物ノ利ヲ考ヘ利ノ其中ニ其所ハ民ノ為ニ其

之家ノ為ニ其地ニ利アル其中ニ其事ヲ見テ用ユル所ノ

経ヲ編ミ之ヲ定ル時代ハ其年ニ依テ之ヲ用ヒ今ニ至ル

小判国三十七匁宛替し申銀相場 新多人ニ候ニ付
代金ニ而古金ニ引替ニ而當時通用之儀ニ而上米價ニ而
ニ而新金引替方ニ而御勝手候得共甲州代金ニ吹替
られ當時世上金通用世ニ出形古金国々候得共代金ニ而之 金
古金之價上金 通用之殘金ニ而壱之大判甲州之一分ハ
又正三枚ニ而由古甲金ハ 古枚ニ而相ニ而 上之不足ニ而
ニ付ハ多金五信ニ而高金ニ付も 松平 御勘定奉行
府ニ而 江戸御役所之金ハ甲州一両之金ニ付 株も
金ニ而上遠ハ年株之外ニも甲州株之外也 壱朱金ニ而甲
多株 其外 五ヶ年ニ而宮ノ米 穀 千両ニ 世ニ而無用
何多ニ甲州壱朱ニ而 京株 之外 京ニ 京株 無用ニ

多分甲州株ニ而 壱分株 又金も無用 せざるもの 御座候
壱分株ニ 壱分ニ而 壱株 御外ニ而 ハ 米
国々ニ而ニ而 株 御辞退も
御勘定御役所ニ而 府 店 御役所ニ 株 御辞退ハ 不用 年
貢も 古 御役 候得共代 古代之由
数ハ九年ニ而 相 相違之 無據 御勝手被 風候ニ而
金銀米之余分ニ而 凡而 通 政事ニ 金之 用無 所
諸 ニ而 義之 以後之 財法 ニ而 民法 也 後世之
庸人 眼 前の無理之 後ニ 末世の 能 無 無 新規ニ
法令之 新 民法 せさるよう ニ 古 都 宮を 求る
事多く 古法を 行ふ 議 之 處 也 ニ 世 ニ 周 持 之 勤

無事之基地方といへハ諸業之基ニ而天地より森羅万
象生するのミならす人倫を導き耕ニ随ひ亦を元
とし又家々の財宝を其分に随て聚残となる事も知らさる人ハ地方
理者ニ而ハ難計者也依之其事も少く千太意
之趣ニ而候也

一 井田之事

井田ハ古への代の青殷の代より始り夏殷周之三代に至而盛也 租税の
法ハ此法より始る 扨殷周の後ハ文井田之法ありとも今千余代
神功皇后三韓征伐の時 井田之法を伝ふ故ニ其法もの
ミ其方法少く租税之法も相定りにしも 井田ハ礼儀を立事
ありとそしても今の世ニ於て廣前のまゝ成らさる地方の元ハ井田なる

所なれハ古く大意を西土のミに布る民ハ是非無之大ハ唐の法し
洪ハ堯ノ代ニも度々して是を治むる事も井田を以てふ
して仁政を行ひ年貢を取立る事十四ヶ国之中の遊民なく
田を作る者ハ政寄ニより平らの本理を存して稼熟して民
栄へる事の本理国の形を見るへし

一 堯之代ハ洪水のまゝにして耕作すへき田地なし 故に夫より千四百年余
三頭当地之事 其を申す程に千国の文献の人として古くを年貢取立る
其世ニ而も着を以て田地を開き数年の中残植字日本に定免とならく
なし難く其年ハ民も継かたき事也 年々ニ遠国ゟ来る田地少
きゆへ耕作田も多く不自由し

一 殷の代ニも洪水もあり土地も開き田地崩れ候ニ付て井田を

割法を定む方三百六十歩に（縦横各三百六十歩）一井として九区として九ツにわ
かち一区毎に方百歩にて十歩に十歩是を一田として諸百四十歩をいふ事
八家通一区つゝ各私田を作り中央一区を公田とし耕作して其穀を収め
公納とし其を助法といふ公田百畝の内より廬舎二十畝（八家に一家二畝半つゝ）
残る八十畝実の公田とし私田は一夫百畝として其外七畝の穀を
納むる九分の一の税也を以て法とす
一
周の代に至り助法を改め徹法と成す一夫百畝にて一井九百畝（公田百畝を除く）と
して一田を百畝と定め十六分に田中として百畝
と定め一夫に四百畝を与へて壬年に穀を収め其の百畝の内十畝の
年貢をとる是を徹法と云ふ是に堅固にして田地も能き年
貢を定め一井九百畝の内に公田を別に定めずして毎年捨べて
壬年に出作す十分一の税をとる其の代一夫の受田百畝の内十畝
取の税を定め是を徹と云ふ徹は又通の義にて十分一の税
なりとして此法を用ひ一井九百畝の内より一夫に百畝つゝ公田百畝も
内より八夫に廬舎二十畝（一夫に二畝半）を引き残り八十畝を公田とし八百
八十畝として私田を八家に分ち一井の耕作し其の年の穀を
割付公田八十畝を一年の年貢と調へ八分を其の役にて取る殷にし
助法を又徹と用の助法と云殷に助法は九分の一にて殷より八夫
受田を作る公田を八夫力を合せ耕作し私田を八夫
一ツ耕作の事を勤め公田の穀を献上して後
一国三法を用ひ貢を徹助法よりて其周の徹法の徹は通之通之
法は毎年八分を以て耕作する徹法之を行ひ八百十畝を定め

一 毎年作之様ニ天下ニ国郡ニ依而ハ畑ニさへものあり 豊凶ニも民
皆同作あり
一 夫之上田ハ百畝中田ハ二百畝ニて上田ハ壱年休耕し
中田ハ年休ミ下田ハ三年之休ニ作り何ても三百畝宛之三年
ニ百畝宛之作候也 一夫年々同田ニ作る事無之と云事
作候也

但日本ニ古ハ休ニ作りとて隔年作りし由其後ハ畑作ハ
同畑ニ田之物作りし随處ニ而当年ニ而植之
千年ニ作物をも作りとも凡休ムといふハ無之 稀作を
毎年耕作を係ニ而も作ニ稀ニ作て麦菜類をニ作る荒田也
一 作休ミて稀作を仕事ニハ稀ニ有之事也 畢竟ハ今年ニ

稀作仕ニ当年休メ翌年ニ作を悪しく少く米して凡二三年
ニても収り少き所ハ此等の如く一年置ニ又作して休ム
作らんとするハ当年形ハ当年ともに毎年耕作を致ス右休め事の
ハまつハ右作焼畑抔ハ壱年も二年も荒野ニして休めるむ
焼立畑作を仕する之田者悪しく遣て耕作請させ候ハ
田畑ニも水腐場ニ而割地にて年季ニ而荒悪割地ニ
作り有之国も御座候也
一 田年二度も取ものハ百畝之田を減耕作させ当年十分ニ取候ハ
二度之取ニも成候事なり 又土地ニ作事を見とて 又穣ニ田地なき
所も有之年五も取候ハ 二度取之田者ニ而 百畝ニて三年ニ而三
妻宝残り事ハ定のかく百畝作して凶 百姓之所ニ成てあり 人多

一　去る者又新田を開き田地悉く荒地と
成り家ニ二畝半は田ニ肉付广全くならて土着新作
するに付て所有之又二畝半は植付消し草を色々と
て農事を仕置て捨之候得共所有之畝を山間に而て
六ヶ年一ヶ年ニ合て年貢も取り是を合て其畝ニ定とて二畝半を
以て農家は日米を九ヶ月入七十余日を男女ともニ植
させて手間を兼く粉を植て米穀を調させ候や農業を仕合
業を為得る者ハ其余として米穀をおくらせ又其高を家職
としてに所は又病気扶として実を成す年貢を始させ
人の田を盗し農業を為すを聖断として年貢を残
すや其を伝へ為手間抒せぬ様ニ保ると定むるもの也

一　夫役等は諸所に其分役を用ひ是ニ從ふ事を乗し大体と
情弱之者は唯安易ニ計りては病身ニ為せしと私と住も候て
農業を精出させる農人の楽也
一　祭礼の入用ニ至りては田地を以て宮の末なものゝ定りなる祝田
の外ハ百姓人ゝ田畑取りて年貢を出させるなり
一　国人の者共人ハ日米の世帯を相立候て上作ニ金銀を入用ニ付候
国の者共人別ハ日米の田を人別之用の者共ハ斗ニ応じて一歩
日米の割ニ者百之日米ニ田方ニ様式畝七歩八畝余を貸て六合
寄之者共人別也二升として去年者ハ合五合金銭を人別貸之国ニ而貸千石を
方別十畝ニ日米ニ上様ニ為る三人の寺分を田地にて去る故
六畝七分余りとして米麦之六升五升之余三石余り作田一畝を受

田や

但其の代の尺ハ八寸を一尺とす 許[illegible]殷の
代ハ十二寸を一尺とす是商尺之 今日本の曲尺ハ則商尺之
周尺ハ八寸残を一尺とす 西[illegible]の尺也之 周商尺ハ十二寸を以周尺ハ八寸
を除けハ寸六分六厘六毛余ニ成ル

一 周之歩ハ日本の曲尺ニて四尺八寸ニ当ル之日本一歩ハ六尺五寸四分余
則其方四尺八寸方を歩と云一畝残三十歩一反ハ三百歩ニ接ルを一町
三十歩の田の上中九等を等して立毛を分ちて積
高を[illegible]成 田畑并物接町ハ百石と云ふ今の村をもて不
積り[illegible]

一 井田ハ九百畝ニして其内中百畝を公田とし

経界并の字の如く 溝洫を界して 井田とし 畦畔の如く
ニ溝を分て九百畝を区分 経界分明也

一 井九百畝之図

井九夫九百畝又一夫百畝宛ノ
間ニ道遂ヲ上ニ径行ノ一井毎ニ
間ニ溝有り溝ノ上ニ畛有り

一 出夫家之一井と四井を一邑とし 邑を[illegible]
とし四邑之丘とし 丘を切つて 甸之[illegible] 甸を縣とす 二十
四縣を都とし[illegible]
[illegible]十二[illegible] 二十[illegible] 二千
[illegible]里や

徑
畛
塗
遂
溝
澮
川

遂徑

遂の上にある道を溝の縁のうへに於て拵ゆる道也一丈ㇾ
溝の上にある千丈の路をいふ所の畛也畛の路也
洫の三方に栄東の畛を記す所也

溝洫

一夫百畝にある溝は深さ八尺広さ二尺八一人分の用水
溝之十夫井とある所を畛といふ横に有溝深さ各四尺
百夫丘と丘との間にある所百里なる洫の縦に有洫深さ各八尺
千夫有百里之間溝有洫道広二尋（一尋六尺一尋八尺）小溝也
萬夫有千里の間に小川を有深さ広さ大河也

右遂と溝洫澮川の五道より徑畛塗道路は一夫より百夫
千夫萬夫と其々有能合は日本にて東海の中山道なと
いふ道也又其一国一郡也大井の溝も小溝と云ふ大
溝へ出て又分出にも流落大河へ流れ出る所なり一井分溝より道
徑と畛すへて知るものや
但大昔も上古大内裏有之其頃大路と申す大小
東西の縄又小路と縄を成各の名今もって遺風
平安城に有名所大路小路名様なるや
一 今世山野治民を囲て耕田を初其外水路之外拵自然
之法文有之地形により徑路遂溝之法井田之法をも
考候は何ことも手本と成候儀あるへし

一 井方一里　九百畝　民家八夫
日本ノ数ニ直シ（三町十七反七畝二十四歩／四十一町三反六畝二十歩余／二万五千三百六十五坪余四夕ヨ）

一 邑方二里則四井　三千六百畝　民家三十二夫
日本ノ数ニ直シ（百町三十四反七畝二十四歩／田四千百町四反四畝十二分余／二十五万五十四坪三分余）

一 丘方四里則四邑
日本ノ数ニ直シ　十三町八反三畝二十四歩／田四百八十五町七反七畝余ヨ／二十一万八千五百十五坪七十一ヨ
出軍賦　戎馬一匹　牛三頭　甲士三人　士卒十六人　物頭

一 甸方八里則四丘　五万七千六百畝　民家五百十二夫
日本ノ数ニ直シ　四十六町十六反六畝二十四歩／田地五百八十一町七反余／二十万七千三百七十二坪余
出軍賦　長轂一乘　戎馬四匹　牛十二頭　輜重車馬　甲士三人　士卒七十二人

一 縣方十六里則四甸　二十三万四百畝　民家二千四十八夫
日本ノ数ニ直シ　一里十六町　三十三町五反八畝二十四歩／田地二千九百二十八町四反歩余／二百九十五万八千四百坪余
出軍賦　甸ノ四倍　先ニ示ス如クニ倍シテ知ルヘシ
縣八ヶ十六ヶ　甸ノ四一ヶ

一 都方三十二里則四縣　九十二万千六百畝　民家八千百九十二夫

一 同

日本ノ数ニ直シ　二里二十三町十六間四尺五寸四分　四千五百六十三町六百四十四町 [illegible]　二十二万六千三百二十九万 [illegible] ヨ

其八方ニ積リテ共ニ百里ニ方一方ニ積リ [illegible] 四面ノ [illegible]

方六十四則四郡　三百六千九百六十四畝　其 [illegible] 方二千七百六十丈

日本ノ数ニ直シ　五里二十町十五間二尺五寸四分　田地四百六十五万三千二百四十三町ヨ　二十四万六千三百四十六万 [illegible] ヨ

同方六千四里ニ方ニ百ニ一同ノ八里ヲ縁トシテ

[illegible] 兵車百乗 [illegible]

制軍賦　兵車百乗　戎馬四百匹　牛 [illegible]　甲士三万人　士卒七千二百人 [illegible]

一 王畿百里ニ方ニ百里 方百井 九百万井　其 [illegible] 方 [illegible]

日本ノ数ニ直シ　八十五里十六町　五十五万二千人二十四万　田地千百三十六万五百四十町六百四十四畝下　二十一億千三百六十万九千四百六十 [illegible] ヨ

制軍賦　兵車万乗　戎馬四万匹　甲士三十万人　士卒七十二万人 [illegible]

一 司馬法井田ノ法ハ大司徒ノ遂人百畝ヲ夫トシ三夫ヲ屋トシ三屋ヲ井トシ

[illegible] 三屋ヲ一井トス 井ハ九百畝ノ十分ノ一 十通ヲ終トシ

[illegible] 宝方百里ヲ万井九百畝 [illegible] 兵車百乗 [illegible]

十通ヲ成トシ 十成ヲ終 百万井 [illegible] 宗 [illegible]

[illegible] 十成ヲ [illegible] 千乗 [illegible] 天子 [illegible] 大 [illegible]

[illegible] 用 井田 [illegible]

[illegible] 井田 [illegible] 今 [illegible] 相税

のなき百姓を責る事　松杉竹ニ至る迄悉くけつり　千代ニハ
貢助の法ニ遠く離れたる事ニ候得ハ猶更様成世ニ逆ふ
隔井田貢法助法も今の是合ニ益ある筈也　然処ニ元井
田となる所ニ相当する者ニ延るものや

一 農夫耕作して百姓壱人ニ百畝（卑田ニ而ハ九町二反余程）の田を以て農夫ハ九人を
農ふ也　上の次ハ八人　中ハ七人　次ハ六人　下ハ五人農ふ也　中等庶人
の在官ハ其禄を以て農夫一家之為る貢法の税を出し勝る
事を為る百畝之業　百姓之家ニ作る事積る所ニ尽き其五計年貢
事務十分之内ニ而八分計五升米ニ成る物納ニ而ハ其ニ分五升米
当年ニ而ハ百畝ニ而男子及夫人ハ衣服道具諸用の足る迄ニ付
より凡漢ニ而農業ニ而ハ物も十之一　当年成年之収納ニ有之事

百姓之為ニ不便なる事　古人貢法ニ而定る所も有之候得共　今世ニ至而
ニ而ハ其百姓の法ニ而民の為ニ利益ニ成らず候得共　今ニ至ても
此世ニ至てハ上古之禄ハ不足ニ相成　当世ニ而は用の不足ニ相成候人
も知る事ニ候　今時ニ商人共の勝手ニ任せ候故ニ至る所ニ而百姓
窮乏ニ相成

一 地方之事ニ付別紙ニ記す

附　田地一反三百歩　唯余

夫ハ太極動て陽を生じ静ニして陰を生ず　陽ハ天となり陰ハ地となる
天地陰陽の両ニ而　地ハ静ニして形あるもの徳を東西南北四方ニ定め陰陽合
合体して万物生ず　天地四方を合ニして六合と称す　地方
の根元とす　地方を能々知る時ハ能く天地之道ニ通る　森羅万

謬説也と云せすといへとも按するに土地を弁する段をもつて
考るに地方を論するは物の分てる所なる陽の處し三代の昔井田の法
も六尺四方を一歩とし田地を歩にて六千歩を一町とし古法の一里を
四方を一里とし三十六町を一村として其の六町を一里と定てといへとも
井田の方六町四方の田千五町の場所井を合て九ケ所を一里と定へし
州一村を以て方六町の面積ハ一町数ハ六里と定る
按するに是ハ町一里を六尺四方にて一歩とし三百六十歩
を一段とし六十歩を一町六町を六十町とし十六町を一里とす
城郭の所在ハ町数も六町を一里とし中古より六十六町を一里
と改む今も陸奥国の古制の如く六町を一里とす白川関より西ハ六町ハ東ハ三十六町
を一里とす是の如く是の町数も六十六ケ国に至りても六町の数離るゝ事なし

但田地を分て上中下とし六尺四方を一歩とし中古より三百六十歩を
六尺五寸を一段とし其田を一坪とし歩数の田の中にて六尺五寸
四方を一歩とし三百六十歩を一段とし千段を六十町とし古開
検地は六尺六寸を一歩とし今の検地は六尺三寸
を一町とし六尺の田を今は一間といふ中古検地の代は知らず
六尺五寸四方を一歩とし六十町を一里として古検の時代
六尺三寸四方を一歩とすること近世よりなり後に六尺三寸ともあり
然るに近世備前国にては文禄四年より寛永年中の検地は詳に知らず
山崎闇斎先生其の頃の遺書を考へ且東郷に
命じて諸国の田畑を道路を検地せしめし時に文禄四年に六
三百歩を一段として検地の法は天地四方を合せたる数なる故

一 畫ニ有る湯奉ニ付まハ盈ル以先前ニしも有之帳ニ書て検
地之節湯入合雑ニ之の数ハ少しも中失して田畑合せ五引と
欠引等相改り計り新ニ書入候ニ付湯入合新
しく高相と生る哉之く田畑ニ有之の数ニ無て有之候
とも其ノ分出ル国之検地ニて減高有之候大閣出来之升
被用候ニ付出る大目まて大閣検地之しと四ツ有之三ヶ所余
打りも之例ニ付将軍ニ被代ニてハ余之奉之二寧り設
取役付まろ人之ら三ヶ所ニ被打りまて 此奉之是寧設ニ成 其
堅相改ニ其ニ此ニも大閣検地も湯入之代ニ其ニ数ニ有之
三ヶ所ニ打ち下之ニ新規之の様ニ成まて事ニ候（附余）評ニ
人之ら是例 附代 等数り之め 二ヶ所ニ被之之る也

一 国郡 令里之事
　附 地境之 出入 理非之事
人皇第十代 崇神 天皇 之御時 始征夷の年 定り まし第十三代
成務天皇御位之年 乙亥 二月 始て諸国 にて 国造 を定め
国を三十二ヶ国 こし 人皇第十四代 仲哀天皇之御 時 其之を定り
程 其第十五代 神功皇后 三韓 征罰 の時ハ 西代 井田の国
法を 所定 之 の仕 其之 定めハ 大蔵 之 其 に 出之 の数 を 増り
其年を 撰行 湯 を定め 溝 洫 を 堀 も 其 路 此 分り 通 て 天
下 之 農 を 教 の ら 租税 の 法 定り と 以下 上代 ハ 郡 縣 御 之 し
境も 定 まらハ 第四十二代 文武 天皇 の 御 時 海内 六十六ヶ国 定り 国郡
之 名 定 て 候 大宝元年 中 にハ 律令 を 定り 郡 中 に 村 里 を 地

理りの事ハ四十五代聖武天皇天平七乙亥年吉備公行基菩薩
相議之人勅して日本を五畿七道六十六ヶ国二島と定め
別郡縣郷里邑巷を定め撰び郡別田地の廣さを立て町段を
秋田畝を定めて東西を南北を縦横とし七歩畝ニ三年ニ府を建て西
満とし小中上の三等ヲ以て穀を割し後何以て中田を以て行
基本とし余を二等ニ充右ニハ吉備公早稲法と申す太閤七石ハ出る
事のみ法作も穿鑿して開かる上ニ段々歩割を定むる法の
地ヲ出状を切り畝歩を定め田畑を出検し右諸遠村々を
検を補ひし田圃の人ヲ分るを公取を定め歩の数を二百とし
古の五十歩を一段とし里毎ニ其人数撰み石高検地を
し免租税之法も稍備りし處其後代ニ於て不揃の地

一 歳を経て検地と申すもの始まる事を始とす
御当代 地方始り候年
始記ニ地方を為し候頭書ニ有之候を述へ田畑收納法其他を記
続き其法ニ従ひて治国ヲ致す郡方経済の事を論す要説を
在ても之を務とし治世安民の為ニ此書を著す地理ニ要く用水川除
経済出納利害ニ至るまで播種の法を知りて五穀の種類及び地味
天下の根元成事ニ農業之用検見取法之始まり[illegible]
民の根本ニ有之然れ共利有ルを理論して出来
要を治め候事ニて[illegible]租税を根元とし[illegible]
事故[illegible]地方[illegible]
民の難苦[illegible]

中ニ而も尚條河以下ハ揚ケ高ニ成ル事ニ難ク渫仕ニ相成候の
儀ニ付候而も不知儀在之而利任せの事に揚ケ高ニ成り候事
計ニ相成申し候 算筆ニ達し候而ハ誠ニ熟仕宜者ニ御座候而も術者ニ
之地方功者と申ハ愚成事ニ候 其外業をも能く存候人ニ無之候而ハ不叶事
ニ御座候 地方流ニ而と申候而ハ無之事ニ御座候

御当代ニ至り候而ハ地方ハ伊奈流紀州流二流ニ而 伊奈流ハ
御入国以来伊奈備前守殿ゟ代々相伝 御普請も
并ニ田畑之反別縄廻し 御代官を始伊奈半左衛門殿
支配有之候而御世人ハ 紀州流ハ
同御代享保十八ケ年紀州小刑部と申人江戸町奉行へ被召出
伊奈備前守之者 経済之道ニ達し 其筋ニ而其地方之事を致候人也

始り候而 伊奈流ハ御入国以来紀州流
之節 相替り 自然ニ絶行 伊奈殿ニ而も今の世ニ御用
御料所地方の規矩ハ都而伊奈流之

一 上方関東共ニ田畑ニ付而事
　附 御料所地方之事

一 関東関西之事 伊吉逢坂之関ゟ東ニ而関東と申候
とも云 関ケ原ニ而も関西と申し 所ニ寄逢坂之関
ハ箱根の関ゟ東者陸奥を関東と申候 由御府内ゟ
而も上方筋関東筋ゟ西御国之在来ニ候

　武蔵　相模　上野　下野
関東方ハ　上総　下総　安房　常陸

伊豆　甲斐　出羽　陸奥

此外にも十二ヶ国程関東と云

上方ハ　山城　大和　摂津　河内　和泉

外　近江　丹波　播磨

此五ヶ国ハ上方と唱ふ又畿内と云

右之外東海道筋中国筋北国筋西国筋なと都て上方と唱ふ

上方関東の二ツに分る時ハ大概二十ヶ国ハ関東方と云其余之国を上方と云

上方筋にても近国ハ五畿内とて別段之事く是より外の国ハ東海

道筋中国筋北国筋西国筋四国筋なといふや

一　上方筋ハ年貢を取に田方多く二畑方ハ一分計也関東ハ田方

少く畑方多く候ても伊豆甲斐出羽奥州抔ハ大抵田

畑方半也関東ハ畑方ハ出羽奥州ハ田畑半分之所

の国々に上方筋ハ畑方ハ以上も三分一通例にて関東之取

是も国柄なるや

一　御料所無之国左

紀伊　尾張　伊賀　志摩　備前　越中　若狭

周防　伯耆　出雲　因幡　長門　阿波　土佐

淡路　筑後　大隅　薩摩　壱岐　対馬

右廿ヶ国御料所なし此外国々ハ孰も御料所有

一　石高之事

附　高来之事

石高と云ハ村ニて作る所の田畑諸地土地を見とりして上中下の
位をわけ石盛を極め田畑屋敷まて之を石数当分石高
ことなく其村高之ニ辻と云而同し依て辻と写る二科申の高
何程と云ふ所務にて辻を以田畑ニ高をかけ集めたる之辻を
定め其合を集めたる形ニ付て限 其辻合辻扱と申者る道
治と写辻ともいふ事合集めたるを辻と云而同し 其村高と
云ふハ其之戸数ニ而何百何十戸の村と申ても其家
頭分家数家に附代々の文永の頃分 其々都の南北年
家の附に東西南北にて其ニて一段何百何ノの村々
関東にて後関東ニ永にて後にて百何千其文之村を
以て不定に以後村々を定め不定之聖籍也 土地にて

勝手まちまちも文禄年中秀吉公の命ニて従是一統ニ検地
有之て引続 并公以後慶長検地も有之割に近く寛政ニ至り
諸所ニ而改 天正文禄之頃ハ石高にもなりしと見へたり 以前ニ定字ハ解之後
寛保延享元年中解題を仰付らるゝ 十年之内と 寛政之頃ニ至り解の字のみと申用ゐる事也
今其之ニ云ハ別年貢物成の納方之事之ハ租税の納方
諸色二種物成ニて物成ハ其外の物成
まちまち定物を置き 其外 以来百石ニ付金限五両
成物まれ此度年貢を取るニせよ 取立物の諸税
ニて其中ニ 其外納方 以別村々ニ而 其名を取立る事
納る事也 村々ニ而同し 何事も里方ニ而 取る所ハ土地所在
ことニ見込を申し 永高ニ而定ニて取 又村々ニて其物成 其ニ而

高村と云ふハ中古より唱来候後世ニ而ハ[illegible]
事ニ而候大切成ものヽ
但し本村ハ古来ニ而根元[illegible]論を経候[illegible]集合
所と[illegible]村[illegible]古来より[illegible]相見[illegible]候
東遷[illegible]之後ニ而ハ[illegible]高札を立
村々軍役を割付[illegible]郷村[illegible]東照宮[illegible]
御入国後関東御縄[illegible]しくハ本の条[illegible]検地帳
古来[illegible]村名と[illegible]古法[illegible]御代官御軍
家之御代ニハ[illegible]御知行所[illegible]御村々[illegible]
其[illegible]御割附代ニハ[illegible]御知行所[illegible]知行書
又御後関東之後ニハ[illegible]御地頭[illegible]

信長秀吉之御代々[illegible]検地ニ而ハ天正[illegible]
村ニ而[illegible]被成候
[illegible]御座候とも[illegible]村々
[illegible]御収納[illegible]御代官所[illegible]付
[illegible]銭[illegible]五割[illegible]検地[illegible]
[illegible]五割[illegible]
[illegible]一村[illegible]一村之内[illegible]
[illegible]心得[illegible]候や

一 [illegible]之事

附[illegible]一統人数之事

[illegible]御領主[illegible]

以て事を始る知行歴地租帳等を用ひ来る也一偏ニ行ひ来る

たる也小事は穂束を所宗の附候郷ゝ見利ゝ[illegible]を置て[illegible]

指し[illegible]て[illegible]永禄[illegible]事役定[illegible]田地

坪ゝ割付て郷ゝ二[illegible]を有田地一坪を[illegible]として

六十歩を[illegible]千把ハ事役[illegible]を[illegible]古例

人皇三十七代孝徳天皇大化二年始て戸籍計帳班田収授之

法を作り田は三十歩を長とし十二歩を広とし[illegible]の

長さハ三百六十歩を一段とし十坪ハ一町とし段の租稲を

定め[illegible]代[illegible]三百歩[illegible]町[illegible]

[illegible]永[illegible]知行[illegible]苗畑の町[illegible]

見利[illegible]後[illegible]百[illegible]千[illegible]定り[illegible]代

三都[illegible]段別地租[illegible]一町ニ[illegible]民[illegible]の

租稲一束二把田地百歩ニ[illegible]百把[illegible]

百[illegible]五坪[illegible]把[illegible]苗[illegible]

田[illegible]稲[illegible]束[illegible]

知行田地百町[illegible]石[illegible]

百石稲[illegible]大[illegible]民[illegible]

三百[illegible]事役[illegible]千[illegible]

[illegible]知行[illegible]人[illegible]

[illegible]人[illegible]人[illegible]

事[illegible]役[illegible]兵[illegible]武

[illegible]人[illegible]武[illegible]

之例多くハ縄高之方ニハ二百文迄ニ而ハ無反別の村も有之候
永高之事　此ハ田畑共ニ永銭何文宛と書出し銭高ニ成
候処又ハ反別不改田畑村々ニ而ハ畑ニ当る永
高無之文ニ当る諸色高ニ積之候村々有之候ニ而ハ又不
残永ニ而ハ貫文ニ関東ニ而ハ永何貫文と書ニ而金何程ニ仕
候ハ何も永高ニ村高も永高ニ而御年貢ハ永高ニ而積候
瀬替を見候ハ一反ニ付何程と極り候ハ無之高ハ永ニ而之市
中ニ而永銭と貫数ハ田地ハ運役等ニ而有る居候品ニ而
居候ニ永高ハ中古年貢ニ永楽銭ニ而納め候故ニ永銭
ニ而相成る永楽銭ニ而見候其外ニ永高ニ而も追て永高
ハ其節ニ而も有之候ニ而無之候ハ其訳ハ得と相尋候ニ而相分る

村永高村何程ニ而候村ハ杉田村別村高と有之村ニ而ハ永
高村ニ而ハ分り兼る古代ゟ銭高之儀も有之候ハ当時ニ而も取
役人村方ニ而も穿鑿有之候得とも未相分候共高ニ而村
永高村何程も有之ニ而何や

一　永高之事

永高之儀ハ高数ハ御年貢代金ニ相違無之ニ付積銭
目ニ而定も有之候得とも金ニ而ハ和銭ニ而永楽之物代を以銭
買米等ニ而可申と定メ有之候内ニ永楽銭相止ニ而無之候間
御支配永年中御金取立鐚代ニ而当時も御竿ニ附立
慶長年中より永楽銭ニ而御代金ニ付相成
永と採用之事越後村々ニ而関東ニ而も有之ニ六

当時往々有之候上意命ハ有之候ハ永楽銭多分ニ成年
貢ニも都而永楽銭ニ而納む命せられ候故鐚銭を永楽銭ニ而
御用之由ニ而年貢ハ物ニ而候而も永楽銭ニ而納むべきとは不成る
鐚銭ニ而相納来る所世上ニ而繁用ニ而候而也
永楽ニ仕来り候法度ニ而成所ニ而ハ候而永楽銭通
用ニ成て田畑ニ列して永楽ニ而納むる事ニ而其外今ニ而物ニ而相納候
竹ニ而永楽ニ而永楽を唱ふ一村ニ而割付ふ其代
拾地と申す列有之候永楽別ニ而文田畑年中ニ位有之ハ
永高之内列に拾地せしむる所ハ其外に田方ニ永代被仰下候
永高ニ拾ヘ畑も同様之ニ而永納迄も今も一村ニ而永高之ニ而
其永二百文土地之位ニ随ひ高下有之候又ハ地所帰候

有之定頼ニ而其銭永別水盛へ田方永高文ニ而相成候
を納む畑方ハ其永楽銭ニ而納む其外鐚銭ニ而納む所々永楽
壱文之代鐚銭四文を納む事ニ候年貢其外附合候年貢之取
納之事ニ候永楽納成之分今種々積永壱貫文ニ付鐚四貫文計代成ニ而
今も永高之積ニ而永別永盛之分ニ而壱貫文之列揃来年之内同
知郡参列ハ名郡辺ハ拾地不盛ニ而有之候所ハ其外ニ而候所ハ
永高銭用ひ有之候永盛之分銭五貫文をもとに今も永高
として永壱貫文拾地ニ而五代として其銭ニ而諸役ニ相勤候ハ
世間ニ而用ひ拾地之分ハ納来候所年貢ハ納来り候納む
畑方ハ永盛壱貫文ニ鐚銭四貫文として納め来や其法之筋
座候ニ付永高之村今ニも有之候列国郡鬼石村

之儀ハ村役人共ニ而割合永納之頭金ニ而取立割
糸鐚田方之儀　御勘定之儀ニ付上納之筋者永ニ而銭ニ而致之
中古ニ而ハ　畑方之分ハ永高ニ而取立候ニ而も候ハ
於ても其外之儀ハ百姓共相談之上関東ニ而　御定之御勘定長
年中御定之御割付之地方之永高ニ而取立之年貢納め候
畑方之儀ハ納来候石ニ而相立候得共大分之永高之文
之儀者石代ニ而取立候得共大分之事ニ付取立候得共候
定候得ハ其上ニ而定候永ニ而も取立候ハ貢ニ可取立候得共
之ニ而ハ取立相違之畑方田方之分ハ畑方石代ニ而永定之文頭金
之村々延宝二年関東ニ而代官之取立候永高一文
永二斗七升　之ニ八斗八升　相成ニ而其村方ニ而

延宝之年ニ而　御当国代官
其以前永定之儀ハ其代官所之割付高ニ而定而
中古ニ而ハ諸国ニ而も皆是迄之代々畑方永ニ而定
関東之御領並ニ而御代官ニ而当時之永高ニ而候ハ
之儀ハ御定之大分之儀ニ而上納之事ニ候得共
之儀ハ永ニ而取立候代々頭金　代々往古ハ一永
相違之中古ハ一畑之内ニ而古代之取立ニ而畑方
畑方之永ニ而永高ニ而文銭ニ而田方代之候取立ニ而永
之畑方之何分何程之石代ニ而其外ニ而も
畑方之永ニ而其内ニ而も古代之通之儀ニ而
永高永文之上取立候ニ而一永ニ而之文

籾壱石ニ付何程と定候ニ而永何程之年貢籾五石
納ル事也、籾の中ニ米弐斗五升と申事も有之候、今も
銭を遣ず知行主へ米弐斗五升代銭を出し、百年来
米穀を借候ニ付、実之米を以弐斗五升を
米蔵ニ入、弐斗弐升米代ニ納ル事ニ候、此年の不作ニ付
壱石代ニ付、実之米ニ込候ても古法ニ而ハ麦三升ニ茂候
何ら之事ニ五ヶ年年均ニ而知行所ニ而茂当然の事ニ候
今壱石ニ付何程壱斗弐升大豆代ニ而米ニ而も可願之
事ニ有り
但右所ニ而ハ壱斗五升米ニ而ハ銭ニ而何程何毛付候事

一

五ヶ年

新田之儀ニ候ても萱地或ハ芝地又ハ池沼杯を植付
候所ニ而地出来ニ付年々毎秤なと相成候場所ニ而別段
請取地之儀も有之候得共田地杯と違ひ候場所之大概を
地所へと違ひ候ニ付年貢之外ニ茂役の請掛り無之
之米之外ニ者銭ニ而もの取立候由一同伝馬ニ而不残令依
ってハ文伝馬ニ而相請候ハ、至而不残ニ而茂候ハ
願候得共之を請候、年貢計納候事之関係
之添地有之候ハ、其場所ニ而も相場村居ニ而も
右村村居多候一概之村居ニ而も相定ニ而一村
ニ而も有之候ても、帰り方出候ハ、多分村居之寄段候返く
地割之上ニても可成地所之儀ハ壱ニ而ハ不残の見込之請之

一
縄竿地割ハ上古ハ二間ニ六尺五寸也　南北之竿地
割縄ニ而二間ニ秘法有之候事也
小竿之事
小竿ハ二尺五寸ニ而　小竿之縄分ハ二間三尺之村
上田ハ八寸五分中田ハ下田ハ上畑ハ中畑ハ三寸五分也
上田ハ家居ニ有之ハ八寸分畑ニ而ハ小竿之八寸分
認中田下田ニ而ハ相分ニ而　三寸五分之認之相分而小竿
之小竿ニ而相極ニ而延畝分　其外縄毎ニ而有之
之間之六尺五寸之分と　小竿とハ小竿之外ニ而有之
之間ニ相極ニ而丈ニ而　二間之間ニ而相極ニ而　丈
割　小竿之外ニ而下田居也

一
間竿之事
検地之竿ハ六尺五寸又ハ六尺三寸
竿相極ニ而ハ三尺五寸ニ而有之候ハ三間
不足ニ而尺ニ而有之候　又相地ニ而上代ハ六尺五寸竿
之六尺三寸竿之積　天正之頃之相地六尺三寸
竿之長之六尺三寸竿ニ而竿ハ六尺五寸ニ而竿之割
但竿割ハ上古相之間竿相割ニ而ハ又ハ山野間竿之地
之竿ハ地不相応ニ而有之竿地広ニ而居住竿相応
之竿之村竿之縄之位竿之分間尺山間其段之欠
古竿之間尺地不足　之村ニ而竿相竿之有之候竿
之也

一 町反畝歩之事

昔時ハ田畑六尺四方を壱歩と云、弐拾歩を壱畝程ニ〆壱段と
云、三百六拾歩之積を壱町と云、又ハ壱町弐町と添ても
町反畝歩と惣名 反別 名寄高 惣外何
反歩を秘と云 反別ハ町ニ〆何程と定る所を割
何畝何歩 何厘何毛迄不残して 掛又田畝を壱歩ニ入 歩ハ
縄町分ニ〆其上を書出候ハ何程何寺歩数を本歩田甫
積畝の数を以て知る也
長三拾歩 検地の頃より 寺ハ三百六拾歩 奉
寺者ハ六尺四方之中古六尺五寸ニ改 又ハ検地ニ
以て六尺三寸を以 間棹 御入国後者も未だ
以て古ハ六尺四方を壱歩とす 京都将軍家之時代
迄ハ三百六拾歩を壱反とす 天正文禄之頃 不残検地
以後検地を十割 三千歩を壱反とす 秀吉公
時代よりハ六尺三寸四方を壱歩 三百歩を壱反と定
歩と大三百歩を壱反とし 二百歩を小と定候
天正文禄頃の検地ハ六尺三寸 大歩十歩を壱畝
承水帳之頃の検地ハ六尺壱分の間棹を以
田畑三百歩を壱反と定め 則ち寺の検地ハ
田畑ニ歩の数を壱 中畝ハ 田畑ニ歩ハ町ニ壱
歩数を云 本歩ニ歩ハ町ニ壱歩 ト云
世変の事 是を以て 御入国之後 何れも検地の事

也又領主地頭之時ニ而も先規之通取計可申哉
多分ハ先例之通りなり

一 除地之事

附 除地ニは数品有之寺社へ不掛例ニなり
前来ニ年不入之別ニ免除ニ而掛高除ニ而今ニ至り別
所ニより見取ニ而も検地之上ニ而御除地同様之地ニ成
村ニより古来之又ハ伍年之外ニ高除屋敷之分も有之
積り之上ニ而除地ニ而村高之内ニ而も引高ニ有之
村方ニ而別段ニ古く名目地所ニも在之又ハ除地ニ而寺ニも有之
寺社除地ニ而ハ大分ニ而内ニ相成大坂ニ而も御朱印地之外ニも除地ニ而今ニ至
門前ニハ寺領村付村高之内除地ニ而申ニ而寺社人之ヲ扶持
之又ハ古来の村方新開之除地ニ而除地ニ古代の
不知ニ新検之節除地ニ成又ハ除地ニ相成ニ而古
之除ニ而村方ニ而除地ニ相成其外除地之違ニ而
之を写シ内訳ニ記し古来之除地ニ有之
不詳不知仕来之村方ニて無年貢ニ而も田畑反
別除地とて除地ニ取扱ひ除地ニ而之

一 除地ニ而其村方ニ而内ニ成候ハ検見村中ニ有之
百姓之別合ニ成ル百姓寺社ニ而ハ不定之例ニ者年ニ別ち
浪村内ニ而内村より百姓ニ而除地ニ而は寺社ニ而除地ニ而寺
百姓ニ成候ハ向後寺社ニ而も不定之除地ニ而裁許ニ相成

一 免之事

寺院持茶其外ニて茂萩野ニ相成候地又ハ畑無之
林ニ有之候分を集メ稼之為残置候村ニ応し候て入る
主并ニ反別ニ而も高ニ結ひ年中反別ハ検地帳ニ除キ未山手
貢ニ相成候分ハ小物成ニ有之年中定ニ相成百姓ニ而ハ地頭
ハ不用ニ付而運上米ハ名目有之場所稼
ニ相掛り候も其外又ハ年貢藪畔ニ有之地と申ニ而ハ年ニ付も其外
四ヶ所ニ而も一概ニ申ニ而ハ山手米ニ而新名ニ相
成申候　米ニ付候ハ年貢の儀ニ而ハ其外へ
又ハ納米ニ付候米迄も茂ニ而有之候ニ有之候
稼ニ候へ共諸国ニ而別而も仕候ニ而ハ手数ニ付候へ共ニ付
茂ニ付ニ山手米ニ而も此ハ年貢の名目ニ付候へ共其外ニ有

是ニ付山手米永取ニ而の村々ニ而ハ所ニ寄山手米永取諸
ハ定納山手米永取ニ而ハ其外ニ而村ニ応し候て入る年貢ハ山手米ニ而
上納ニ付候米ハ其外ニ而反別ニ相成検地ニ而も入候ハ
年貢年中定ニ而検地帳ニ相成候分ハ検地帳ニ而も検地
之ニ付候ハ年貢ニ而米高を以一反ニ付ニ而村
寺院の除地ニ而反別ニ而も新ニ山手米ニ而ハ新ニ遣ニと
ニ而も大ニ反別ニ山手米ニ入候ニ而ハ其外ニ而ニ付ニ付年貢
ニ而ハ其外ニ而名目ハ検地帳ニ定ニ相ニ付候

一
野手之事
野手ハ大方山手之類秣場入会の場所ニ而又ハ村限
ニ有之其外村ニ而持候林検地帳ニ反別ニ而も其外

所之別ニ場所ニ而も入海年貢ハ其村定の通り可納め
又ハ其所ニ而別段地所永引除ヶ願ひも有之候得ハ
吉蔵方ニ而本地ニ而可有之候 下総国海上郡
銚子役地ニハ都而入会之山林無之 稚海村ニ而有る
地請も納む

一 海之事

是ハ漁猟之所ニ而海川附村方ニ而ハ其所の持ニ而も有之
其外年貢ニ而ハ無之 漁場ニ而も有之又 水帳ニ不載村ニ而も
ニ海ニ而川ニ而も不拘運上金相納ら有之其外河之役ニ而入
有之や浦方村方ニ而ハ 海川共ハ都而海ニ而も有之
海ニ而有村ニ 此者ハ猟師ニ而ふ古来より仕来ニ而有之

勿論上方ニ而ハ無之関東 御代官所之浦方ニ
而も海辺之村ニ而海上ハ定免物成ニ而永ニ而高内
ニ有之候共ニ而も其所之猟師方ニ而運上ニ而納候や
又其外役之ニ而運上ハ其所々ハ夫々之猟師共
出来之物成其外ニ猟師之役ニ而ハ海年貢之分ニ而も金銀
役銀ニ而浦方并米金銀役銀ニ而納めて能き可致穿鑿
同地之役ニ而又ニ而ハ其外之船之事又浦方ニ而も年
ニ而出来之物ニ而も浦ニ而年貢役金銀納めも能き事ニ有之
請之事ニ而も 御定之田畑之年貢を不し其毛上ニ而永代
其所ニ而も 田地之流地定免ニ而も其所ニ而も有之段
又浦や海川の漁猟又ハ浦之の役ニ而も浦之の猟之事

為登候得ハ風雨地震なとの気変ニ而海川の渡海も遠ハ
急ニ上り兼候ハヽ生魚等ハ色ヲ損シ候而商売も不成人々ニ日
急の事ニ而候ハヽ陸ニ而海辺ニ而ハ船積の事ニ而も差延し
相成候ニ付有様ニ而有之難儀ニ入候ヘ共加へて生魚ハ肴る
揚候ヘ天地変ニ而年々出風水難等の難儀有之生魚ハ
浦々船持之候得ハ猶更難儀ニ付急ニ猶海之相成候
其上も不成渡海ハ不足事ニ候得共村々ハ御請之代官上様の御公
中ニ古来ゟ海川を渡り往来ニ而猶々ハ向後ハ何
船大渡場有之ニ付も御代官様ニ而此方迄ハ不成
中国の事之不絶海上飛脚を差立村ニ而渡ニ而ハ左様之
船ハ又元禄年中相改メ上ニ而致候事被為仰付候趣也

其外船方村々ニ而も村々ニ而外ニ而も渡世ニ而海
運ノ通り永々年貢又船之納ム村方ニ而も多分ニ而有
之候ニ付私共ニ而訳村方渡世之儀ニ付ニ而も内証宜分ニ而も
浦ニ而不知又ハ御代官様并村々海辺ニ而も猶々趣意之通り
其船役渡海ニ五十嵐門船大切之難儀筋の渡世向ニ而海
ニ而有之

一 山方之事

村中入会之山ニ而山林ニ而御林山方ニ而も猶又遠之の
年貢ニ而村方ニ而請負入候哉山ニ而猶又相揚地ニ而ハ又別
段ニ而も山林の取扱之儀納メ候ニ付米ニ而村ニ而之入会
之入会ニ而ハ其ニ而見之村方新規ニ而も古来ニ而

畠方附古来ヨリ猶以山稼キ之候得共 山方ニ而ハ大体今ニ
至迄も又ハ除地岩石等ニ而 山ハ石河原田畑之出
の儀も有之候ニ而出来之上 畑山畑稼ニ相成
之実ハ畑ニ而兼而之通り山方ニ而畑
之事ニ候之

一 麻之事

麻之儀ハ 麻畑ニ而作付候ハ 麻之儀ハ縄等ニ而 麻苗まき三
升ほと蒔付縦横ニ而 藪ニて 麻の大木ハ 目もと
きとも有之 麻ニ而作付候得共 麻畑麻之出来
作出仕付候之 手入 外畑至ニ作付之 畑へ種付 麻之作
割之儀ニ付ハ 二番之麻作付 麻之ハ 一番刈麻之

作物ハ麻之外ニ形 畑之儀地之外畑も
下畑も皆付而 除地畑等 畑之儀 麻作
之儀ハ 麻之而作付 畑の儀地ニ作付之又ハ
山方の畑地ニ作付 麻之作付ても少々も出来合
之之儀ニ付 二番之畑 大木の作り方 麻年々作付
而者之一麻之 刈 麻ハ 下応出来大木之儀も出来
之者之応 出来之量出 而之候ても 刈麻刈出来穂
積之作出 而之候之 大木の麻刈利種等刈 刈出候
相成之一株 畑田応之出来 又ハ奥山畑稼之出来之
之畑出来木 株之之 刈麻ハ稼 大木出作之出来之
之之之 麻之之 古来ハ畑之之作之之之年

稼地ニハ森ちえかわる常ニ而沼精を庸吉も畑とるへし
捨地ニ而ハ植物も不稼大地ニ値ニ不盤升鶴麦稼ニ付 作ニ而
自然ニ畑ニ畫取りし而 植物ハ不精外畑ニ土地ニ有之の
作物取り有 耕ニ作ハ稼物作稼ニ付ニ而 [illegible]

一 ちへや
稼ニ付ニ年
稼ニ付ニ而者ニ[illegible]而年来ニ[illegible]或ハ[illegible]
ニ二百升ニ而稼地 千分千升二百貫以是之を年稼地も百家
地流ニ而ハ稼地稼貫ニ付ニ而 森ニ而[illegible]稼
ニ而ニ而稼升ニ而[illegible]三反纒ニ而 一反ニ
[illegible]ニ升稼ニ而二戎[illegible]稼ニ而之 ニ反纒ニ而

一 [illegible]田地ニ稼地ニ種物ニ不稲地ニ値ニ不盤升ニ而や
稼ニ付ニ年
田畑ニ五分ニ而村ニ付ニ而ニ而稼地時代ニ不知ハ[illegible]
[illegible]ニ而[illegible]不登録不知ニ而上古ニ而[illegible]稲
ニ而[illegible]年貢も納め百姓持地も[illegible]千[illegible]百[illegible]
ニ而田地の[illegible]稼ニ而[illegible]
[illegible]稼地ニ而稼地ニ而ニ而 稼山中[illegible]ニ而不知[illegible]
[illegible]稼地ニ而或ハ文[illegible]村ニ而
[illegible]ニ而不知村[illegible]年貢納ニ而百姓ニ
[illegible]ニ而ハ不精ニ而村之[illegible]ニ而[illegible]稼
ニ而村[illegible]ニ而ニ而村[illegible]

寺社ニ候ハヽ古くより来て除之村方ニして諸役人
足迄も年来をいけて被下来候年貢別演井之外高反何
宗ニ入 演井池溝懸り之年貢を山守様へ被下候村方を
其外ニ今多反荒村出ニ而ハ古来の村高ニ入る者見届
御座候 是迄井水掛り名目立ニ而外ニ被下置候

一 除地之事
除地と申ハ　寺社境内其外除地ニ相成候分　寺社境内并
荒田畑見取場等年貢ニ不相成候分 又ハ 高外除地
村方ニ而除地之場所ニ有之ニ付 寺社除地高ニ而年貢
地高之村地ニ除地被下置候 寺社領ニ而無之 別ニ而被下置候
諸役ニ而是迄有之候ニ而も 其外地場所ニも相立不申候

除地ニ而ハ寺社除地并村之墓所馬捨場等を
除地と申候事也 又ハ除地と申ものも有 新田地之節
縄外ニ致候地之分ニ而在来除地場末新地も除ニ致
又新田之地ニ除置候分有之 此除地ニ而も被下置候

一 除地之事
除地と云ハ寺社境内或ハ神仏之社ニ付て除き有之所
其外年貢諸役ニ掛り不申除地ニ而 又年貢ハ納め
候ニ付 祖先之人足ニ而 壱反之村ニ付而其外
又諸役之分ハ御免ニ而年貢ハ納諸掛り物
除地と除ニ也 又ハ年貢諸役ハ村方ニ而納ニ而も 番
諸人足并ニ付 御納物ニ而ハ 御納物ニ被下置候

累年陰くも陰ニ成る陰地の荒地とい訳違ふへし

一 田ふく之事

是ハ新開高之内ニ而 新田村有高ハ五百石ニ而有る
村高之内ニ而御取箇代知行之村高ニ五百石
田畑村方之内ニ而 村々高之外ニ寄ニ而村方御取箇
高辻村高之内ニ而 五百石之内ニて 一村
田畑御高之外ニ而有之 御取箇ハ五百石ニ而村々
御取箇ニ而御高辻永御取箇ニ而 多分之内 御取箇之
ニ而有之ニ而 御取箇ニ田ニ而も御取箇 高辻ニ而 御高
田畑ニ而村高ニ 年貢高辻ニ而御取箇 御取箇 御ニ十石
五百石之内ニ 五百石之村高之内ニ而 高辻ニ而 御取箇之

一 高之内水ニ而御取箇 二ツ之内ニ而高ニ而

ニ高ハ三斗五升入之取箇ニ而 百石之取箇ニ而御取箇ニ而
御定之御取箇ニ而高辻 御取箇 御取箇御定
年貢取箇 入ニ而百石ニ而高辻ニ而 五百石之取箇之御取箇
御取箇ニ三百石ニ而取箇ニ而村高之内ニ取箇 あり

一 延之之事

是ハ高辻之取箇 御取箇ニ而 御取箇之ニ而
御上取箇 御取箇之内之取箇ニ 高辻ニ而 御取箇 高三
之五百石之内ニ而 高辻之内ニ取箇ニ而御取箇 御取箇
五百石之内ニ而高辻之取箇ニ五百石之内ニ而 五百石
城之ニ而取箇 御取箇 五ニ而取箇 高辻 五百石

右はのこる五斗五升之出米の分を与ふる所る也 以下ハ
検地帳る村高之し 外紀州割高る村高割合出候ハ与ふる
由也
但大和国 一石三斗紀州ニ而米二斗五升五合ニ当る紀
州の出米は凡六千七百五十石余 右ハ内
大和紀州之 二千五百五十石余 出米也

一 検地帳之事

附紀州伊都郡ハ高野之寺領也 代也
和歌山領并和山組 紀州ニ而年
和歌山ニ而新田畑高並 出来免ハ少なし
先ゟ紀州ニ而 一石三斗米ニ升 並又百姓ニ而田地年貢米

ニ而石免之 ニ而帳ニ一畝ニ
畝分 和歌山領の村免ハ 二つ五分ゟ六つ半迄の検地帳を 并
山検地米 ニ而畝 并 右之石ニ而 高ニ而帳を
割合ニ而 年ニ而免 村高 何ゟ免又 出免の村高と石高へ
二つニ而石帳 検地帳ゟ 検地帳ゟ 検地帳を 和歌山領 二つ五分
の検地帳ハ 免ゟ 高ニ而 免ニ而 根ニ而の二つ
石帳ゟ ニ而 帳ゟ 高ニ而 石ニ而 畝ニ而 石高
紀州割合 右国之ハ 出免 村 ゟ 二つ 高畝の 検地帳
並ハ和村高 百石五斗之米 高畝 石高 の二つ 二つ 高ゟ
と和国ゟ ハ新地ニ而 并 現石村高 ゟ ニ而二つ年ゟ
二石 出免ニ而 高ニ而 出来 山検地ニ而 村ニ而 高ニ而

の村方　本途之小物成共ニ諸之門ニ而壱ハ定免之上ニ壱斗ニ付掛
成諸役ハ定免之上小物成ニ柏ニ取立候、川筋之先組方如何ニ
候哉、其余ハ定免之外村々船役代出来、小物成諸役ハ其ニ有之
御蔵ハ年貢高町々御蔵米ヲ以而諸役ハ料取地出来候
外ニ田方村方之割合ニ御座候、又ハ不足出来之時ハ田地ニ而
壱反ニ付壱斗ニ而門割地出来候哉ニ付此上又小物成諸ニ
無之候ニ付門割ニ而先年何ニ而掛文之百姓ニ而役人知行ニ而
百姓ハ役米御蔵高ニ而割ニ付門割之出来候ニ付知行ニ而御
の小物成二ヶ年分三ヶ月之御蔵米之百姓之取捨之積り
藏方ヲ以テ三ヶ月ニ而猶又小物成諸ニ而無之也
一
知行所之内古来ゟ猶又取ル小物成之事ニ而永方ハ永
壱斗之米壱石ニ付五升代積リ米ニ而壹厘壱升米
之高也
有徳院様御代享保十巳年ゟ壹ハ二百五拾文余定
永壱反ニ文米壱石之積リ二百文余之高ニ而如何と如文之
元文辰年ゟ畑方米永ハ壱石ニ付五升代積リ壱ニ二百五拾
之高ニ成ル事也　但小物成永方小物成諸之積ニ而永壱反ニ文
米壱石ニ付五升之代壱反ニ而壹斗壱升之大小物成諸之
減ニ小物成之内其外永定納物ニ而御勝手方ニ而ハ但又
御取立之諸運上人之諸役人ニ而年季物之増減有之文字之
数年増減之諸役ハ御勝手之上ニ而壱年物米諸役ハ永
御取立之又私領方ニ仕来之定納物之取御勝手割合壱ニハ

不申儀ハ不及申候得共 不案内之者共[illegible]
之者ニ申付候ハヽ手抜ニ相成候ハヽ組の者共[illegible]
相勤候ニ付[illegible]中[illegible]
之者ニ随殿[illegible]

一 御代官
新規[illegible]知行割付[illegible]格式
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

覚

別紙
金[illegible]
[illegible]
知行割付[illegible]

一 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 御代官所々私領と入組候村方私領も請込候上ニ而
之地御料ニ成候者共先年より所持いたし来り候
享保年中御代官江差出候証文之通ニ而私領之
者へ所持いたし候出作ニ付而ハ御料江
預り大勢之者共所持之田畑ニ而私領之者共所持
[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 米相場成立候儀ハ元来相場ニ而上より御仁政之御沙汰
思召候事ニ御座候
思召候ハ思召を以而下々之御為ニ無之 諸国米穀出来不出来ニ寄 多分之
米相場は相場ニ而御救 米穀出来不足之節ハ 米価高直ニ相成 小前之者
共難儀仕候 左様之節ハ 相場を以 引下ケ候様ニ仕 則ち年々出来不出来ニ
ニ而米相場之為ニ御座候 諸国米穀之相場之儀ハ
御国之要用之儀 右ニ付三都ニ而も相場相立 米価相場を以
出来之相場ニ而 米穀之儀ハ 元来ハ 相場を以 御救之儀ニ
相成候

但右ニ付米相場之儀ハ 其元ニ而出来不出来ニ寄 相場之上下仕候
儀ニ而 右相場ハ 御当地ニ而 米相場之儀を以 相場を相立候

一 米相場之儀ハ 相場を以 一統之上ニ而 相当之
相場相立候儀ニ而 相場之者共ハ 元来相場ニ而
思召を以相場相立候ニ付 諸色之相場も 相場之儀ハ 大切之
事ニ御座候 相場之儀ハ 元来 相場を以 米穀之相場ニ而 相場を以
出来之相場ニ而 右之相場ニ而 米相場を以 元来相場ニ而
相場之儀ハ 相場を以 米相場之儀 出来之上 相場之上ニ而 相場を以
元来相場之儀 相場之上ニ而 相場を以 一統之相場ニ而
思召候儀ニ付 相場之上ニ而 元来之相場 米穀之相場を以 出来
相場を以 相場ニ而 相場之儀 相場之上ニ而 相場
元来相場を以 相場を以 相場之儀 相場ニ而 相場之儀
相場ハ 相場之上 相場之儀 相場ニ而 相場を以 相場

其何之年ニ限りてハんとみ来挨拶ハ一寸渡り付如くる事知ま
但ちと然るとはまたハ又来かりそめ来るとぞ然る除ケハ一寸ま
如く
又一段ニハ其別の俄ニ右衛門にて所作事ニて見事とハ一寸極
是れ程なる事と四年迄年俵出しまする儀相ニ知り如ハ
其外儀之候事儀まとさえらんとる事こそ其様ハ別儀見ます
之身編ニ来まとニ其内にハ儀ニ出しとも来まさまと見哉
何様に右御ニ添ニ右様儀出し切る様其文ます
同にハ見る程ミたるハ右にて是れ見るハ右にてハ
手で大の二ツ掛其様ニ見事掛右様ニ其ま掛御如く承
ま之六に右入都合承ま右同承掛り付掛如来ま儀之承

様其ハ程のまゝ角まで然し様承もにて御同承ニ掛ケ
ろこえしき古右衛門の様角ニ又儀ニ見ゐニ掛如く身
一円儀ニ出し其文様其儀掛り様事とのまの衛ハ何
ま程人の評とる此右ハ此程何如其右衛之役人又ハ色里
の見る先其知り右衛し然ニ之事右衛門ニ然ニ右ゐるに付
ろうま方評ととのふ事計右衛俵出し右儀承様又ハ清人
用ニ右然ゆるとハふも手前方ハ此し右にて百石ニて承
右ゆ文之候まさんとさし方にて右之衛門ニ又何其入門
落とや元禄之知ま右衛門右の右之様ニ右ニ角ニ年
儀承様文又然にて跡之右衛之事ものとの事如く
つ一其段何れハ其気様様見事其掛右衛右ニ右文

一
籾出目之儀ハ其の米不足ニ付
二千五百石余
此永の内割書左之通鐚ニ而取立候
上方関東相場ニ而
鐚銭百文之儀京銭百文ニ而永ニ而鐚銭文ハ太之
百文ニ付人足永ニ而右之桂井小相場ニ而永ニ而此永
其文ニ而五百文之内定法ニ而之永相場京銭百文
銭ニ而文永之内割書之内ニ而永之内ニ而京銭百文
之田畑ニ而御ニ而米永銭ニ而二銭ニ而定法ニ而
元米永相場ニ而相定法書之永の内割書之内ニ而
の二割書之内ニ而百文ニ而二度して五米相場ニ而

二度ニ而内割書之永之銭相場文右之百文ハ
五米ニ而相場して米五斗ニ而永銭相場文ニ而定法ニ而永
書上文ニ而米銭百五斗之相五米相場ニ而永銭相場文対
割して永相場文米銭五斗ニ而田之百文の米書
五斗相場ニ而永銭相場文米銭五斗ニ而永
書上文之内割関東銭五斗代相場之銭相場文
書上して永ニ而定法ニ而五斗ニ而永之五斗ニ而相
書付之内銭五斗代書之銭五斗代ニ而五米の米
右之銭相場一百文之定法書

一 永ニ而銭相場文
　世五米　相場

何村
　依其五斗代

永弐拾七文
卅七米弐拾五石　　田方　但し米三斗五升書
内
永弐拾七文
卅七米弐拾五石
卅永拾七文　　畑方　但し壱町歩

一　二百石　　大村　但し弐拾町歩
卅九米五拾石　　田方　但し弐拾町歩
二百五拾石
卅五米弐拾石
内
二百五拾石　　畑方　但し拾町歩

内
米弐拾五石
米弐拾五石
卅五米千五石　　田方　畑方　但し田畑

此田方高百石ニ付高を以て反米五斗ツヽと見る田畑米
壱石畑米弐拾五石と見分ニ六ヶ敷定を以て本来拾五
石と見分畑ハ実ニ五石之永ニ米弐拾三百石の積り
致ス積り永拾五文二百拾石や卅七米五斗ニして米弐拾
五石六分を定メ拾五石と相成永拾七文ハ対する拾合
壱五石ニ米壱斗五斗を以畑ハ米二斗ニ五合ニ済ミ
畑ハ米弐斗ニ之法と見る右利畑永ニ実を以
之永壱斗文米弐石五斗代ニ壱ヶ田畑等分凡そ拾ニ石
有之を以て役立皆壱石五斗実を以実米壱石

五升も取出候故又五升除キ置六斗と仕候得ハ田畑とも
違の無之様ニ手段ハ如ニ而五升ハ田畑同見出来候出候壱石
五升ハ畑斗の出候ハ壱石五升ハ計五升の上六斗ニ而相当也
田畑ニ而壱石六斗ニ壱石ニ而斗

一 上田ハ一石ニ付
右様ハ一石ニ付二三割半の法之外ハ法用ニ而致候ハ
田畑ニ壱石ニ付四升の割ニ而三斗余ニ付四斗余歩
五斗畑壱反ニ付五斗七斗五升出来候 壱斗十五斗ニ付田畑
合壱石ニ付之外ニ而五十歩ニ付見も相違ニ付出来候也
四斗ニ而と下候ニ而法ハ右割中ニ而ハ夫ニ付二石一歩ニ付一二
五斗法ニて一石之除ニハ八斗と仕候例之ハ八斗法と申候

上田壱反壱畝八分六厘
　但壱反ニ付四斗
　但出来同断
　但出候同断

中田壱反ニ付
　此ハ壱斗四升五升
　此米壱斗九升四合
　此取六斗弐ツ八分

下田壱反壱畝六分六厘
　但壱反ニ付三六
　但出来同断
　但出候同断

下畑壱反ニ付
　此高壱斗六升
　此米壱斗四升四合
　此取九拾六ク

山畑壱反ニ付四升
　此米五升七合
　此取三百八拾七ク

　但出来六分
　但壱斗五升出来

田畑合三百四石四斗弐升
此米七十壱石七斗六升九合
内
米壱石四斗四升　田方米
米五斗七升七合　畑方米
此永三百八拾四文　但壱石ニ付五斗替
右者畝六分違ニ付壱石ニ付五斗宛中江米永
五ツ違ニ而
一　田畑六分違一ツ六分違ニ而三百四石余之内田畑九分〆六歩ニ而目ニ寄取极
合ニ
三百石
此米　五拾石
二百五十石

此米弐拾九石六斗壱升六合
内
米壱石五斗四升　田方米
米九斗六升　畑方米
此永二百八十文　但壱石ニ付五斗替
大畑之位之分　田畑同然畑米弐拾石五斗壱升余役中取六斗
五米程田方弐斗米　畑方も中取米也　六分違ニ而　畑方五斗分　畑方米
中取七歩通六之分下ヶ大之分減石中取合五米〆減ニ而も
畑田米ニ付中之内ニ付米之高ニ而も不見合ニ而相違を
付ニ米ニ而と相成候事六分違之中取ニ付役宛米之通
之通ニ済候事ニ而候や
甲斐守申付大目附

出作田壱反　此米壱石五升

上田壱反ト

此籾壱石六升

此米壱石五升　四升

此取石六斗之く

中田壱反ト十ヶ六分違

但此籾五斗之

但米四ツ

但壱石五斗四升也

右坪刈之内中田壱反十ヶ六分違之上籾ニ而此米壱石五升

壱石六升実籾之取ニ付て三斗五升　四斗五升ニ而六分違

之違ニ而五斗之俵ニ取を除候一五石之決ニ而八斗四升余弐斗ヲ壱石之

六分違之上籾ニ而此米壱石五升ら取籾米の定免之内又但之

右四升上之籾ニ而此米四升四斗之日行中下ニ相違も日行之

此米四升

下田壱反ト

此籾八升

此米三斗五升

出作田壱反八升

此籾壱石五升

上田壱反分

此籾壱石

此取石四升

此米四斗八く

中田壱反ト

定免四ツ

日行

年増此籾十日之分

年増此米定免四ツ

但此籾五斗十ヶ

但此籾

二ヶ之分

定免四ツ
但壱斗五升也

大川行

此高米八升
　　但石盛八ツ
此取米二斗四升
　　取永ニ付
此永百廿八文
　　但高ニ付
下畑壱反
　　但石盛六ツ
此高米六升
此取米壱斗四升
　　取永ニ付
此永九拾六文
　　但高ニ付
山林壱反歩高四升
　　茅柏ニ付
此取米九升六合
　　二分三ツ
此永三拾八文
　　高四ツ
　　但永百文五斗替
田畑合高五斗四升

此永取拾文
此取米壱斗四升
　　但百文ニ付代
右之通ニ付て田畑二分違ニ相成候
一 永壱反ニ付取米之内相当之割合永取候之村田
畑等も永取米壱斗四文ニ相成候大坪田位ニ応じ
野林等ニ而其外十文の石盛を以て五文不足者
地之位壱坪ニ付壱斗壱升二合五斗壱升相談之
て米壱斗五升之割十五の石盛や其を以て永之
其之外五文不足之
一 田之内之石代の位何ニ付三分之宅地の高免役被仰
の石高分附之軍役ニ付候の積り由のまた之文を

遥ニ長短有之候　知行損益之積りかはらん事
有之上ハ知行ニ高割仕者知行ニ一倍違ひ可有
之事ハ積り候て百石仕者ニ高割積り百石ニ積り候ハ高ニ知行
百石仕者知行五十石ニ　對田ニ而　其半ハ百石ニ高割
高ニ高割　然仕者ハ　永々高割有之候ニ付高割可有之
知行ニ仕者ニ不混集約　難渡又ハ九割有之所郡有
場ニ付而も知行ニ同し　不作有之様之勘弁肝要也

一　田畑上中下之違ひ有之事
　附 並ニ位付之事
田畑上中下違ひ之儀ハ　石盛ニ有之　其田畑ニ位付を以付
候而其位ニ石盛を定ム　ケ様之訳也　田畑共ニ上中下位下々

田畑對用有之以上畑之石盛ハ中田之石盛ニ同積ニ而位付ニ而も
中田の石盛之事ニ上畑ニ用て知行高積り之　中田の石盛
以積り有之ハ位盛之事又ハ田畑六分　其のうち割
畑の石盛石盛を除ハ　上田十二　中田十　下田八　下々田六分
有之ハ上畑中田の石盛十ヲ上六分違ひ上ハ一段ニて六ツ之盛
盛之事又ハ中下　下も上ニ而下々石盛之不済ニ盛之事を
年ハ六分違ひ之古法と云知行古概上畑と下田の石盛
ニ對用有之ハしかも上者也　検地之法の積盛ニ而六分
違ひ中田上畑之積り高盛　下田石盛之上ハ上畑之
畠之ハ中田ニ而右之積り中ハ下田の石盛之
對用有之ハや　六分違ひ之法を能考

世界長者番付　　二之巻

世界第壱番　　実録

其比名高き日本国中長者番付の三百余程あり三
千ヶ国二割の人数に分て其外長者不
残集まる十二の帳ひとしくの天下長者の内又は割の
日本人別の帳面に内二割のうちは日本民の積りて其外の
も二割の内に金子を二割の帳合の割の帳面に
多くれと其よし日本高家のなくれや其関東と出
此度とれを吟味しこれ帳面を相改る

　申日長者
　世界長者　　　　伯爵

三百銭の外に田地長者名前の内地元長者又一名の
家名世間に名前を出し日本長者外八家内に田地の長者名前
名前上るとこれ申渡す　百姓のにも二百年代の高
名の長者や又地所にて帳面割付長者として田地長者へ
下の高千石と相定る

地方凡例録 巻之壱